



## 万葉びとはお酒が好きだった

佐々木 政一（昭和51年卒）

昨年の本誌第6号では「万葉集と紀伊国」、今年もまた万葉集で、今回は「万葉びととお酒」について触れてみたいと思う。

私は24歳で医師になり、自分で給料が稼げるようになってからはほぼ毎日のように晩酌を楽しんでいる。

ビールはAsahiのスーパードライ、日本酒は大吟醸酒、ブランデーはHennessy、焼酎は伊佐美（芋）を愛飲している。また鹿児島県徳之島の黒糖焼酎、高知県の栗焼酎もなかなか乙な味である。しかしウイスキー（あまり飲まない）とワインはよく分からない。

万葉びともお酒が好きだったようで、万葉集4500余首中お酒を詠んだ歌が40首ほどあるが、本稿では祭祀や祈禱の御神酒は割愛して、実際にお酒を飲んでいる歌を中心に紹介する。

なお、現代語訳は私見を交え、お酒を愛する者（いわゆる酒飲み）に都合の良いように訳した。

その中で主役は何と言っても大伴旅人（万葉集を編纂した大伴家持の実父）で、こよなく酒を愛した。

I. 大宰師大伴卿、酒を讚むる歌十三首

1. 「<sup>しるし</sup>駿なき <sup>ひとつき</sup>物を思わずは <sup>おほとものたびと</sup>一杯の

濁れる酒を 飲むべくあるらし

巻3-338」

（この人生、くよくよ甲斐のない物思いなどに耽るより、一杯の濁り酒でも飲んでいる方がよほどましだよ）

「駿（しるし）なき」とは効果のない、何の役にも立たないこと。

「濁れる酒」は糟（かす）を漉していない酒でいわゆる「どぶろく」。漉したものは清酒（すみさけ）といった。

歌碑：福岡県飯塚市 飯塚市歴史資料館（写真1）



写真1：大伴旅人の歌碑（1）

2. 「酒の名を <sup>ひじり</sup>聖と負せし <sup>いにしへ</sup>古の

<sup>おほ</sup>大き聖の <sup>こと</sup>言の <sup>よろ</sup>宜しさ

巻3-339」

（酒の名を、聖（ひじり）と名付けた昔の大聖人の言葉の何と結構な事よ）

酔客は清酒を聖人といい、濁酒を賢人といったという中国の故事に由来する。

3. 「古の <sup>いにしへ</sup>七の <sup>なな</sup>賢しき <sup>さか</sup>人たちも

ほ  
欲りせしものは 酒にしあるらし  
卷3-340]

(昔の竹林の七賢人たちさえも、欲しくて欲しくてたまらなかったものは酒であつたらしい)  
「七の賢しき人たち」とは中国の故事にでてくる竹林に隠棲した七人の賢人をいう。

歌碑：福岡県太宰府市 太宰府歴史スポーツ公園 (写真2)



写真2：大伴旅人の歌碑 (2)

4. 「賢<sup>さか</sup>しみと 物言ふよりは 酒飲みて  
酔<sup>あ</sup>ひ泣きするし 優<sup>まさ</sup>りたるらし  
卷3-341]

(分別ありそうに偉そうな物を言うよりは、酒を飲んで酔い泣きでもしている方がずっとましだよ)

5. 「言はむすべ せむすべ知らず 極まりて  
貴<sup>たふと</sup>きものは 酒にしあるらし  
卷3-342]

(なんとも言いようも、しようもないほどに、この上もなく貴いものは酒であることよ)

6. 「なかなか 人とあらずは 酒壺<sup>さかつほ</sup>に

成りにてしかも 酒に染<sup>し</sup>みなむ  
卷3-343]

(なまじっか分別くさい人間として生きているよりも、いっそ酒壺になってしまいたい。そうすればいつも酒にどっぷり浸かっていられようから)

「なかなか」とは中途半端な状態の意。

これは呉(中国)の鄭泉(ていせん)という酒好きの男が生前に浴びるほど飲んで、それでも飽かず、死ぬ時に「我死ナバ窯ノ側ニ埋ムベシ。数百年ノ後ニ化シテ土ト成リ、願ハクハ酒瓶ニ為(つく)ラレ、心願ヲ獲ム」と遺言したという中国の故事による。

7. 「あな醜<sup>みにく</sup> 賢<sup>さか</sup>しらをすと 酒飲まぬ

人をよく見ば 猿にかも似る

卷3-344]

(ああみっともない。偉そうにして酒を飲まない人の顔をつくづく見たら、小賢しい猿に似ているではないか)

8. 「値<sup>あたひ</sup>なき 宝といふとも 一坏<sup>ひとつき</sup>の

濁れる酒に あにまさめやも

卷3-345]

(たとえ値の付けようがないほど貴い宝珠でも、一杯の濁り酒にどうしてまさろうか。とてもまさりはしない)

「値なき」とは正当な値を付けられないほど貴重なの意。

9. 「夜光る 玉といふとも 酒飲みて

心を遣<sup>や</sup>るに あに及<sup>し</sup>かめやも

卷3-346]

(たとえ夜光る貴い玉でも、酒を飲んで憂さ晴らしをするのにどうして及ぼうか。及ぶはずがない)

「夜光る玉」とは夜も光って見えるという有名な宝玉。

「心を遣(や)る」とは憂さを晴らすこと。

10. 「世の中の 遊びの道に かなへるは

酔ひ泣きするに あるべかるらし

巻3-347]

(この世の中のいろいろな遊びの中で、一番楽しいことは一も二もなく、酔い泣きをすることにあるのだ)

「遊びの道」とは心が楽しみ弾むこと。

11. 「この世にし 楽しくあらば 来む世には  
虫に鳥にも 我はなりなむ

巻3-348]

(この世で酒さえ飲んで楽しく暮らせるなら、来世では虫にでも鳥にでも私はなってしまうかもかわない)

12. 「生ける者 遂にも死ぬる ものにあれば  
この世にある間は 楽しくをあらな

巻3-349]

(生きている者はいずれは死ぬものと決まっているのだから、せめてこの世にいる間は(酒でも飲んで) 楽しく過ごしたいものだ)

13. 「黙居りて 賢しらすは 酒飲みて  
酔ひ泣きするに なほ及かずけり

巻3-350]

(黙りこくって分別くさく振る舞うのは、酒を飲んで酔い泣きをするのにやはり及びはしないのだ)

この13首中3首に「酔(ぬ)ひ泣き」という言葉が出てくる。旅人は泣き上戸であったのであろうか？。

大伴旅人のこの13首の背景について、国文学者・伊藤 博はその著書『萬葉集釋注』の中で次のように述べている。

「大伴旅人が大宰帥(そち)となつて筑紫に下つたのは、神亀4年(727年)の暮れの頃と推察される。63歳の老残の身の筑紫下りは、皇親政治の推進者長屋王(ながやのおおきみ)と旅人との絆を割く、藤原氏の策略であつたと、史家は説く。筑紫行きに伴つた妻大伴郎女(いらつめ)は、翌年の4月はじめ頃、大宰府で死んだ。

次いで、神亀6年(729年)2月12日、長屋王は藤原氏の謀略にかかつて自尽に追いやられる。妻に逝かれて郷愁の憂いもひとしおだった旅人のもとに、3月も末の今の歌群の頃には、この報せはとっくに届いていたはずである。そういうもろもろの悲しみを託し、その苦しみから解放されようとして詠んだのが讚酒歌13首だと思われる。その気持を、旅人は心許す大宰府のんびとが分かち持ってくれることを信じながら、13首を詠んだのであろう」。

また、『万葉集にみる酒の文化 - 酒・鳥獸・魚介-』の著者、一島英治氏は同様に

「旅人は大伴安麻呂の子孫で、代々宮廷を守っていた生粋の貴族でしたが60歳を越してから大宰帥として筑紫に赴任しました。赴任後まもなく愛妻を亡くしました。旅人の酒を讚(ほ)むる歌には、望郷の思いと、妻を亡くした悲しさ、そして名門大伴家の没落といったやりきれなさが隠されています。今日風に言いますと、年老いて後、妻に先立たれ、しかも単身赴任の悲哀を酒によって癒さんとした歌ともいえます」と述べている。

II. 上記の旅人の酒を讚むる歌13首の一つ前に山

上憶良の歌がある。

やまのうへのおくらおみ えん まか  
山上憶良臣、宴を罷る歌一首

「憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ

それその母も 我を待つらむぞ

巻3-337]

(憶良どもはもうこれでおいとまいたします。家では子供が泣いておりませう。また、その母親も私を待っていることでしょうから) 「罷(まか)る」とは貴人の元から退出することをいう。

上記の13首が詠まれた上司・旅人主催の宴席で途中で退席するタイミングはなかなか難しいことであるが、一同をどっと沸かせるような逃げ口上

の歌である。

前出の伊藤 博氏は

「この時憶良は既に71歳。家に泣きじゃくる子がいるべくもなく、ましてやそのような子をあやす妻もいるはずがない。子と妻とにかずけて宴会を辞去しようと申し出た歌であろう。同席した若い官人を含めての代表的心理をうたっているのである。71歳の憶良がそのような子と妻がいるごとくにうたっているところに笑いがある。どんなに引き止められる宴席でも、“母（かあ）ちゃん”が待っていると底なしにのろけてしまえば、笑って放任されるのが常であろう。憶良もその手をここで用いている」

と述べている。

歌碑：福岡県鴨生市 鴨生公園（写真3）



写真3：山上憶良の歌碑

III. 大宰帥大伴卿、大貳丹比県守卿の民部卿に遷任するに贈る歌一首

「君がため <sup>か</sup>醸みし待ち酒 <sup>やす</sup>安の野に

ひとりや飲まむ 友なしにして

巻4-555」

（あなたのために醸造しておいた酒。せっかくのその酒を安の野でひとり寂しく飲むことになるのか。友もいないままに）

「醸（か）みし待ち酒」の「醸みし」とは米などの穀物を嚙んで容器に吐き出し、唾液中のデンブ分解酵素（アミラーゼ）の作用によってデン

ブンを麦芽糖に分解したのち、自然の酵母でアルコールにしたもので、通常処女（おとめ）が行った。「待ち酒」とは一般的には女が訪れて来る夫のために用意する酒。

「安の野」は大宰府の蘆城（あしき）の駅家（うまや）の東南にあった野原（現福岡県朝倉郡夜須町）。

題詞にあるように、大宰府帥大伴旅人のもとで大貳（次官）であった丹比県守が民部卿に抜擢されて都に帰任する時に旅人が贈った送別の歌である。「ひとりや飲まむ 友なしにして」の句に都に帰る友への惜別の情と自分は帰れないという羨望が入り混じった歌である。

歌碑：福岡県朝倉郡筑前町 中央公民館支館（写真4）



写真4：大伴旅人の歌碑（3）

IV. <sup>ばいくわ</sup>梅花の歌三十二首 <sup>あは</sup>并せて序

この32首の中に「酒」と関係した歌が3首ある。

1. 「<sup>あやなぎ</sup>青柳 梅との花を 折りかざし